



<バレンタインデー当日の放課後、ひと気のない廊下で>

「あっ」

「お」

二人の視線がぶつかる。

向こうからやって来た翔に歩美は偶然出くわした。翔の方はちょっと驚いた顔をしたが、それもすぐ、いつものツンツンした態度へと変わった。慣れっこになっているから、歩美はそんなことは、いちいち気にしない。

「プレゼント沢山、貰ったんだって？ 綾香が言ってたよ。それで、いくつ貰ったわけ」

「いくつだっていいだろ別に。お前に関係ないだろ」

「そんなことはないよ。気になるじゃん」

「絶対に教えない」

「何で？ ケチ。言ったって減るもんじゃないし。あ。分かった。貰い過ぎて分からなくなったんでしょ。モテモテだ〜」

亜美が露骨に茶化すと

「うるせえな。いちいち」

軽い舌打ちをして、翔はめんどくさそうな顔をした。

「女の子、泣かせちゃダメだよ。本命のチョコ渡した子だっているかもしれないんだから」

「いたてもいなくても、どっちでもいいんだよ。付き合うつもりないから」

かたくなな態度に、思わず亜美がため息をつく。

「ホント、翔って変わってるよね。付き合おうとすれば、いくらでも付き合えるじゃん。そんなに告白、断ってばかりいたら人生を損するよ」

「分かってないのはお前だよ」

「え？ それ、どういうこと？」

歩美は、思わず聞き返す。

「世間はバレンタインかもしれないけど、お前から貰えないんじゃ、意味ねえじゃん」